

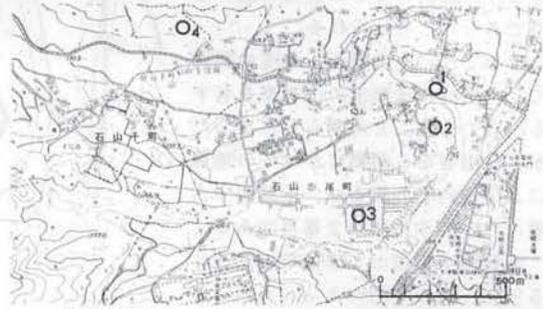
## 14. 南郷丸山古墳 発掘調査略報

南郷丸山古墳は、大津市南郷一丁目にあり、通称丸山と呼ばれる独立丘陵上に位置する。この丘陵は、北方を流れる赤川の浸蝕作用等により北側は断崖をなすが、南側はなだらかな斜面を呈し茶畑に利用されている。古墳は丘陵西端部の最高点に位置し、標高は109.6mを測る。(以下、本文中では南郷丸山古墳のことを「本古墳」と表現する)

石山寺から南郷に至る瀬田川右岸の地域では、古墳はきわめて少なく、その数は10基にも満たない。現在確認されているものとしては、本古墳から赤川を隔てて北側に位置する丘陵の南斜面にある千町古墳、さらに南側の丘陵にある南郷古墳、南郷田中古墳、芋谷古墳群(正確な数は不明。2~3基)があげられる。このような状況下にあったため、当初この丘陵周辺には古墳は存在しないだろうと思われていた。だが、付近に残る“芋谷”と呼ばれる字名が“いものだに”の転訛したものと推定されるため、生産遺跡の存在は十分に考えられた。そこで、この丘陵周辺で宅地造成が計画されたのを機会に、昭和52年5月27日から29日にかけて、造成地域内の分布調査を実施したところ、この独立丘陵上に円墳とみられる小さなマウンドが認められ、付近から数点の須恵器片を採取した。

この分布調査の結果をもとに、宅地造成工事開始前に試掘調査の実施を決定し、昭和52年6月15日から7月23日までの約30日間にわたり発掘を行った。

調査は、丘陵頂部西端にある小さなマウンドに東西



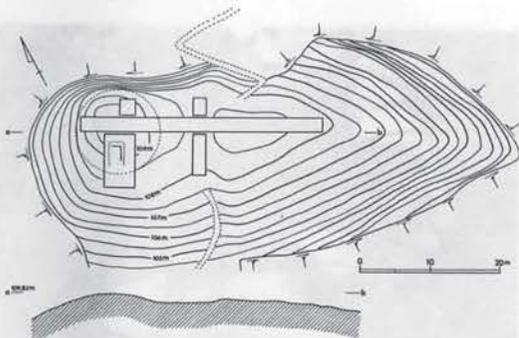
遺跡位置図 1.南郷丸山古墳 2.南郷古墳  
3.南郷田中古墳 4.千町古墳

および南北のトレンチを、さらにマウンドの東側約12mの地点に南北のトレンチをそれぞれ設定し、遺構の確認を行った(挿図)。その結果、マウンドの南側部分で、奥壁を北東に向けた横穴式石室が発見され、これが小規模な円墳であることが判明した。

石室は、地山(赤褐色粘質土層)をわずかに掘り込んだ墓壇につくられており、幅は約2.2mを測る。だが奥壁および東壁を除いて破壊されており、全容を知ることが不可能である。現存する石積みから復元すると、その規模は内法の幅1.1m、全長2.05m以上である。次に羨道については、石室入口部分が破壊されているため不明であるが、おそらく玄室と羨道の区別がない簡略化された石室であろう。さらに石室に使用されている石材はほとんど人頭大から牛頭大のもので、構築方法も、通常石室にみられるような規則性はなく、非常に乱雑に積み上げられている。ただ一つ注目される点は奥壁の基底石である。通常玄室奥壁の基底石は、かなり大きな石材を縦積みにするが、本古墳では扁平な石材を横位置にすえ、この一端にもたせかけるように石材を積む傾向がみられる。

石室内に遺物はほとんど見られなかったが、石室の入口部分付近の散乱した石材の間から、須恵器の杯身・高杯などが出土した。同部分が完全に破壊されているため、原位置を保ったものはないが、いずれも陶器TK 209前後に相当するもので、6世紀末頃か7世紀初頭頃に比定される。おそらく古墳築造時と同一時期のものであろう。

さらに本古墳の石室は、墳丘の中心に奥壁を設定するのではなく、中心より南へ約1.5~2mの地点に奥壁をすえている。この事実と地形等から墳丘の規模を



南郷丸山古墳地形測量図

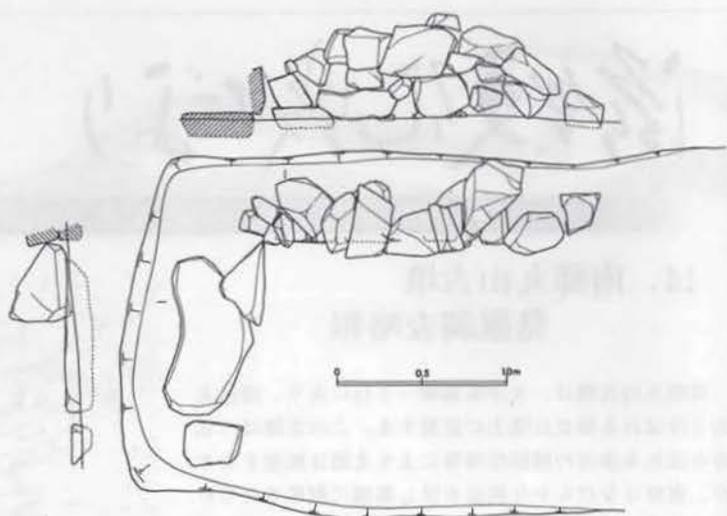
復元すると、直径12m前後の円墳と推定される。また石室は、規模および使用石材等からみて、棺を入れるだけの空間を確保した程度のもので、石室をある程度構築した時点で棺を安置したものとみられ、石室の高さも1m前後とあまり高くなく、墳丘もこれに比例して2m前後の低いものであったと考えられる。

このように本古墳は、今度の調査で、古墳時代後期末の小石室を有する円墳であることが明らかになったが、石山寺から南郷にかけての地域における古墳の調査は、南郷田中古墳について本古墳が2基目である。

南郷田中古墳は、本古墳が立地する独立丘陵の南西にあって東西にのびる低丘陵の南側緩斜面に築造された横穴式石室を有する円墳である。石室は、調査前にすでにかなり破壊されていたが、地山を掘り込んだ墓塚につくられており、規模は内法の幅0.7m、全長2.5m以上で、天井が低く、玄室と羨道の区別がない簡略化されたものと考えられている(注1)。本古墳とは石室の幅や使用石材・構築方法に若干の違いが認められるが、築造年代や規模はほとんど変りがなく、同じような立地状況を示している。すなわち、古墳時代後期末の小石室を有する円墳は群集墳の一部として存在するのが通例であるが、田中古墳や本古墳は群集墳を形成せず独立して立地している。

この両古墳の周辺地域で確認されている南郷古墳・千町古墳などは、発掘調査が全く行われておらず、その内容については不明であるが、おそらく南郷田中古墳や本古墳とはほぼ同時期に属するものと思われる。

このように当地域における古墳のあり方を眺めると、中期にさかのぼる古墳は全く認められず、いずれもが後期末頃に築造されたものである。この地域には、古墳時代中期頃までの遺跡はほとんど認められな



南郷丸山古墳石室実測図

いが、後期末頃に入ると、小石室を有する円墳の他に、須恵器窯や製鉄遺跡などの生産遺跡があらわれる。これらの関係についてはすでに述べられているように(注2)、須恵器窯は、当地域に古墳が築造された時期か、あるいはややおくれで造られはじめ、奈良・平安期まで続き、製鉄遺跡については、いつ頃開始されたのか不明であるが、おそらく須恵器窯と相前後して生産がはじめられたものと考えて差支えないであろう。製鉄遺跡が南郷付近に集中してみられる事実については、南郷から醍醐・逢坂山・山科にかけての丘陵地域に豊富に含まれている鉄が、生産技術および鉄需要の進展とあいまって開発されるようになったことを物語るものである。したがって今後は、南郷田中古墳や本古墳のような独立して存在する小石室をもった古墳の被葬者が、鉄生産にどのように関与していたかについて明らかにしていかなければならないであろう。

(松浦俊和)

注1. 注2 林博通「南郷田中古墳調査報告」  
 (『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 昭和50年)



南郷丸山古墳石室



# 15. 榎木原遺跡 第3次発掘調査抄報

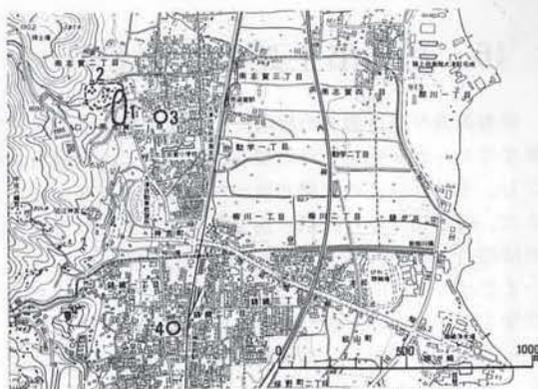
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会は、国道161号線の西大津バイパス建設に伴い、昭和52年6月より、大津市南滋賀に位置する榎木原遺跡の第3次発掘調査を実施し、現在も継続中である。

今回の調査対象地は、第1次・第2次調査対象地(注1)を含むバイパス予定路線上の遺跡で、東西約40m、南北約300mの範囲である。この榎木原遺跡は、過去2度の発掘調査により、大津宮時代と奈良時代末から平安時代前期の瓦窯3基(1基完掘、大津宮時代の6段を有する地下式有階有段登窯と判明)と、その工房跡の一部が発見され、いずれも南滋賀廃寺に関連するものであることが判明した。また、同廃寺の西端を示すと思われる築地堀跡も検出された。さらに、弥生時代から平安時代にいたる遺物も多数出土している。

今回新たに発見された遺構は、瓦窯6基、工房跡の掘立柱建物と瓦を製作するための粘土、前回検出された築地堀の延長部、さらに、福王子群集墳の一部と考えられる横穴式石室の古墳2基(注2)、古墳時代初頭と後期の竪穴住居跡、古式土師器(一部後期弥生式土器か)を包含する大溝、平安時代の土塚墓などを検出した。

この中で、特に瓦窯は、第1次調査で検出した3基と、今回検出した6基との合計9基が、3つの群を構成していることが判明した。これらの群中の瓦窯には、天井部や煙道が残存するものや、登り窯と平窯とが隣接して1群を構成するものがあり注目される。また、工房跡の柱跡や粘土は、工房の規模をある程度把握できるものと期待している。

出土遺物について見ると、灰原からは、多数の平瓦・方形平瓦・丸瓦とともに複弁蓮華文軒丸瓦・流雲文縁



遺跡位置図 1.榎木原遺跡 2.福王子群集墳  
3.南滋賀廃寺 4.御所之内遺跡

軒丸瓦・鬼瓦・埴などの瓦類と須恵器・土師器が出土している。古墳からは、1号墳で玄室袖付近より刀子5本・釘7本・鏃3本、羨道より釘8本・鏃2本が出土している。2号墳は石室の残りが良く、玄室で基底部より2~4段、羨道は天井石の一部が残存し、閉塞石を有する古墳であるが、この玄室より、杯身5・杯蓋2・器台1・壺1・埴1・甕1などの須恵器類と、土師器壺・甕・こしき・埴それぞれ1点が、ほぼ原形の状態で出土した。

しかし、瓦窯や灰原などの大部分は、水田耕作などにより削平され、発掘調査に困難な面もある。とにかく、調査は昭和53年3月に終了の予定で現在なお継続中のため、詳細な報告は後日にゆずることにした。

(葛野泰樹)

注1 第1次 滋賀県教育委員会『榎木原遺跡発掘調査報告—南滋賀廃寺瓦窯—』(昭和50年)

第2次 滋賀県教育委員会『榎木原遺跡発掘調査報告II』(昭和51年)

注2 滋賀県教育委員会「大津北郊における古墳群の調査(1)」(『滋賀県文化財調査報告書第四冊』昭和44年)



榎木原遺跡概略図

## 16. 瓦窯出土瓦の示すもの

分布調査や試掘調査の段階で、丘陵斜面において灰原などから瓦が発見された場合、普通そこを瓦窯とみなし、その瓦はこの瓦窯で焼かれたものと判断する。また、同じ場所から時期の異なる瓦が出土した場合、両時期の瓦窯があると予想する。それは隣接してあるかまたは同じ箇所に修復した形で存在しているのだと想像する。さらに、近くにある古い時期の窯で焼成した瓦を利用して新しい窯を構築し、それらが灰原に混在したものともみなすこともある。それとも、古い時期の瓦を瓦窯のものとして、近くにある寺で用いられた瓦を利用したものとも判断することもある。

このように、時期の異なる瓦が瓦窯から出土する場合、古い瓦が焼かれた地点あるいは用いられた地点と、新しい瓦を焼いた瓦窯とは隣接してあったと想像するのが常である。

ところが、白鳳期と平安期の瓦を出土する瓦窯を詳しく調査したところ、上記のような説明とはかなり異なる結果の出た事例も存することが知られたのである。

史跡崇福寺跡指定地内にある長尾遺跡の瓦窯がそれで、ここは伝崇福寺跡主要伽藍の南東約450mの丘陵北斜面に当る。調査の最初の段階では、白鳳期の蓮華文方形軒瓦(サソリ文)、複弁蓮華文軒丸瓦、奈良末ないし平安初期の流雲文軒丸瓦や蓮華文軒丸瓦などが

出土し、立地状況や、灰原が検出されることから、これを瓦窯と断定した。それは、白鳳期に最初窯が造られ、奈良末ないし平安初期にもここで瓦を焼成したものと推定し、伝崇福寺跡に近接した地点にあるため、そこで用いる瓦を焼いたものと予想した。あるいは、伝崇福寺跡で用いられた古い瓦を利用して、奈良末ないし平安初期に新しく瓦窯を構築したとも考えられた。ところが、出土する白鳳期の瓦の大部分は伝崇福寺跡ではまったく出土せず、約900m南の南滋賀庵寺ですべて出土するため、南滋賀庵寺用の瓦窯という推定もなりたつたのである。また、奈良末ないし平安初期の瓦は伝崇福寺跡、南滋賀庵寺共に出土するため、この時期に両寺に供給したと想像された。

しかし、調査が進むにしたがい、瓦窯である点以外の推定はことごとく打ち砕かれる結果となった。すなわち、瓦窯は平安初期に作られた平窯1基だけであり、白鳳期、奈良末ないし平安初期の瓦はいずれも瓦窯構築の際用いられた瓦であったことと、この瓦窯で焼成された瓦は最終段階で検出され、それは伝崇福寺跡で用いられたものであったことである。この結果、この瓦窯は、伝崇福寺跡で用いる瓦を焼くため、南滋賀庵寺で用いられた瓦を利用して平安初期に構築し、使用されたものと判断されるにいたつたのである。

このように、長尾瓦窯の調査は、未調査の瓦窯出土瓦の取扱いについては極めて慎重であらねばならないことを示す好例であった。(林 博通)



長尾瓦窯出土瓦(白鳳期—1~4・8、奈良末ないし平安初期—5・6・9、平安初期—7・10……長尾瓦窯焼成)